

## 頸動脈超音波検査で経験した頸動脈小体腫瘍の一例

◎植村 忍<sup>1)</sup>医療法人 信愛会 暁生会脳神経外科病院<sup>1)</sup>

頸動脈小体腫瘍は、頸動脈外膜中の頸動脈小体から発生する傍神経節腫で、頸部に発生する稀な腫瘍性疾患である。患者は1年前に左手のしびれから近医を受診、左頸部の炎症と診断されたが特に治療はされていなかった。その後症状は改善せず再診、MRI 検査を受けたところ、頸部腫瘍が認められ、当初の検査所見も確認したところ、腫瘍が増大していたため、頸動脈小体腫瘍と診断、当院に紹介され、摘出手術が行われることになった。術前の超音波検査では、総頸動脈から内頸・外頸動脈を押し広げるように巨大な腫瘍が認められていた。腫瘍内部は血流成分が豊富で、内部に比較的大きな血管が多数確認された。内頸動脈は腫瘍に沿うように走行し、外頸動脈からは腫瘍内に連続する血管が見られ、外頸動脈が腫瘍の栄養血管になっていると考えられた。頸動脈には奇形等は見られず、血管内腔にも特に問題は見られなかった。手術にて腫瘍は血管と剥離され、完全に摘出された。頸動脈小体腫瘍は多くが良性腫瘍とされるが、徐々に発育し、頸動脈や周囲の神経を巻き込み、圧迫していくため、頸部の疼痛やのどの違和感が出現する。

根治には剥離による腫瘍の摘出が必要だが、血流豊富な腫瘍であるとともに、頸動脈内膜への浸潤が認められると、頸動脈の温存が難しくなる。今回頸動脈内膜への浸潤は認められなかったが、内頸、外頸動脈をも巻き込む（Shamblin の分類 Type3）巨大な腫瘍に発育していた症例であった。頸部に見られる腫瘍、腫脹は比較的良好に遭遇するが、そのほとんどは一過性のリンパ節腫脹や、頸動脈の正常な拍動が気になるという方が多い。今回、MRI 検査で診断され、超音波画像にて特徴的な所見を呈した貴重な症例を経験した。

社会医療法人信愛会 暁生会脳神経外科病院  
検査科 植村 忍 072-877-6657